

## 第25回 あらかわ俳壇

投句数	813句(一般の部665句/小中学生の部148句)
投句者数	268人(一般の部141人/小中学生の部127人)
兼題	朝寝、牡丹、薫風、当季雑詠
選者	佐々木忠利氏(荒川区俳句連盟会長)
期間	令和4年4月1日(金曜)から6月30日(木曜)

一般の部	特選	向日葵の太陽を背に反抗期	初音さん
	選評	蕾みができ始めた頃の向日葵は、茎先の部分が太陽を追いかける様に朝は東へ夕方は西へと移動するので、それを背と断定され反抗期と大胆に捉えた処に、この句の醸し出す詩的な一面が感得され面白みが加わっている。	
	入選	伸びきってまた丸まって朝寝かな	若林清子さん
		母の日や遺影の母は歳とらず	鈴木真理子さん
		座禅解く古刹の庭の白牡丹	木下君穂さん
父の日や健康器具の持ち腐れ		三田忠彦さん	
		薫風やゆっくり生きる歩幅知る	紅紫あやめさん

小中学生の部	特選	葉裏から滴り落ちる雨しづく	第三瑞光小学校5年・佐藤円花さん
	選評	木々の葉から、風により滴り落ちる雨しづく。実際にその場所に身を置いているかのように音が聞こえて来る。これを臨場感と言うが実に見事な表現だ。普段から物を良く見て、感じる努力をされている証しと理解したい。	
	入選	さくらの木風にあおられ散っていく	瑞光小学校6年・木元歩武さん
		きもちいい春のこうていはしるたび	第四峡田小学校5年・奥村昊太さん
		うぐいすの鳴きごえきこうと耳すます	第四峡田小学校5年・藤田義七朗さん
かけっこは手にあせにぎる戦いだ		尾久第六小学校5年・山田健人さん	
		あきあかね金のスプンにぼくのかお	伊勢市立御園小学校3年・藤田流歌さん

## 第26回 あらかわ俳壇

投句数	910句(一般の部616句/小中学生の部294句)
投句者数	376人(一般の部110人/小中学生の部266人)
兼題	虹・白粉花・夜長・当季雑詠
選者	対馬康子氏(現代俳句協会副会長)
期間	令和4年7月1日(金曜)から9月30日(金曜)

一般の部	特選	虹立つや人を木立にしてしまふ	山田知明さん
	選評	「人を木立に」とは独自性のある大胆な表現です。美しい虹に見とれながら、虹の魔力によって地上の人々がいつのまにか生い茂る木になってゆく。明るい希望の中に、心の揺らぎが滲み出ています。	
	入選	太陽に帰るまで虹眺めをり	三田忠彦さん
		おしろいの咲いて駅への待合せ	宥光さん
		一葉の端座崩れぬ夜長かな	尾久西さん
父の忌の仏花に摘みし蛍草		安田蝸牛さん	
		万学の祖や記したる夜の虹	野中泰風さん

小中学生の部	特選	滝の音静かに強く響く森	瑞光小学校5年・堀越公太さん
	選評	深い森に滝の音が響いている大きな景を、自分の体感として見事にとらえています。静かでありながら、しかも強い水の響き。森に棲むたくさんの生き物の命をはぐむ、水というものの力なのです。	
	入選	夏の日に海がなみなみしゃべりだす	瑞光小学校5年・高橋美侑さん
		百郡のふもとで侘びる虹の橋	瑞光小学校5年・根岸史佳さん
		舌に咲くひまわり色のカキ氷	瑞光小学校5年・山口菜央さん
天の川ひみつのはしをわたしたい		第二峡田小学校4年・海老原愛莉さん	
		朝起きてぼくの頭はかぶと虫	第二峡田小学校5年・立石琉さん

## 第27回 あらかわ俳壇

投句数	705句(一般の部 550句 / 小中学生の部 155句)
投句者数	245人(一般の部 114人 / 小中学生の部 131人)
兼題	松手入・芭蕉忌・息白し・当季雑詠
選者	佐々木忠利氏 (荒川区俳句連盟会長)
期間	令和4年10月1日(土曜)から12月31日(土曜)

一般の部	特選	松手入一挙に展く空の蒼	大越源一さん
	選評	十月ごろに、今年葉が残った松の古葉に鉄等入れて来年の芽を整えておこうと、ひとたび作業に取りかかれば、今まで塞がれていた秋空の青さが眼に入って来たと言う。平明な表現ながら、余情を醸し出している処に惹かれる。	
	入選	振り向ひてみたつて独り暮の秋	鈴木真理子さん
		手話をそへホームの二人息白し	田中礼子さん
		文鎮に使ひし矢立芭蕉の忌	三田忠彦さん
松手入れ空を一枚剥がしをり		鈴木しおりさん	
		嫺やかな玻璃の絵文字や息白し	宥光さん

小中学生の部	特選	星飛んで希望に燃える願い事	第四峡田小学校5年・奥村昊太さん
	選評	「星飛んで」は、流れ星である。昔から星が流れ落ちるまでに願い事を唱えればその希望が叶えられると言われて来た。掲句の中七の「希望に燃える」に食指が動く。若い時ほど夢は大きく努力を怠らなければ必ず夢は叶うもの。エールを贈りたい。	
	入選	まち歩く息白しこと今気付く	瑞光小学校5年・定方陽祐さん
		心地よきかおりただよう金木屋	第四峡田小学校5年・小池奏さん
		山中に紅葉のもゆる道すがら	第四峡田小学校5年・近藤小百合さん
こうこうと光ひきつれ秋来り		第四峡田小学校5年・ハウィットプロディーさん	
		栗拾いいがをむこうと針ささる	第四峡田小学校5年・藤田義七朗さん

## 第28回 あらかわ俳壇

投句数	1,328句(一般の部 1,032句 / 小中学生の部 296句)
投句者数	611人(一般の部 343人 / 小中学生の部 268人)
兼題	春着・路の臺・鳥帰る・当季雑詠
選者	対馬康子氏 (現代俳句協会副会長)
期間	令和5年1月1日(日曜)から3月31日(金曜)

一般の部	特選	路の臺瞬き忘れぬやうな	相場恵理子さん
	選評	瞬きを忘れてるのは路の臺でしょう。ユニークな比喻です。まだ寒い大地に顔を出した小さな路の花芽が、春の精に出会い、驚き見入っているのかのよう。路の臺の何とも言えない愛らしさです。	
	入選	珈琲は二時まで蝶は港まで	南方日午さん
		鳥帰る正義の翼見せつけて	迫久鯨さん
		折鶴に新しき影春ともし	木幡忠文さん
光る道愛妻歩く春着かな		西谷寿さん	
		食う幸や星野大地の路の臺	野中泰風さん

小中学生の部	特選	鳥帰る最後の潜水深くして	倉敷市立東中学校2年・田村豪さん
	選評	冬の間は川面に浮かんでいた水鳥が春になり北へ帰って行く。「潜水深く」と、臨場感ある鳥の描写が句に力を与えており見事です。長い旅が始まる覚悟に対して、作者のエールの思いが伝わります。	
	入選	おぼろ月夜空に響く笑い声	瑞光小学校4年・平塚望呼さん
		晴天の空見上げれば路の臺	瑞光小学校5年・とんび油あげさん
		冬の蝶まるで小さな星のよう	第四峡田小学校5年・ハウィットプロディーさん
外寒し家につくまで走ろうか		第四峡田小学校4年・長沼来実さん	
		しおひがりたからさがしだはるのうみ	根岸小学校1年・石田和久さん